



日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究 ーフィラーの定義と個々の形式の使い分けについてー

大工原, 勇人

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2010-03-25

(Date of Publication)

2014-04-04

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4831

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004831>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	大工原 勇人
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 4831 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 22 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究 ―フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて―

審 査 委 員

主 査 教 授 水野 マリ子

教 授 定延 利之

一橋大学留学生センター准教授 石黒 圭

論文要旨

氏名： 大工原 勇人
専攻： グローバル文化専攻
指導教員氏名： 定延 利之教授

論文題目

日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究
ーフィラーの定義と個々の形式の使い分けについてー

論文要旨

話している最中に、考えがまとまらなかったり、適当な言葉が浮かばなかったりして、話し手が言いよどんでしまうことがある。そのような時、話し手が発する「えーと」、「あの一」、「うーん」などの形式を、一般に「フィラー」(fillers, pause fillers)と呼ぶ。近年の言語研究において、フィラーは、音声コミュニケーションの遂行に不可欠な要素だと認識されてきており、日本語教育でもフィラーの適切な使い方を指導する必要性が繰り返し主張されている。しかし、一口に「適切な使い方」と言っても、それは一体何をどうすることなのかはまだ十分には分かっていない。たとえば、「えーと」や「あの一)」などの個々の形式の使い分けに関する研究は、いまだ部分的・散発的なものに留まっている。本研究は、フィラーの使い分けを体系的・包括的に記述することを目指したものである。

本研究は、全部で9つの章からなる。

第1章では、本研究の考察対象を規定した。本研究では、仮にフィラーの内包を『考える』、『思い出す』、『言葉を選ぶ』など、話し手が何らかの情報処理的な心身行動を行っている最中に典型的に発話される感動詞の下位類」と定義し、この定義に該当し得る個々の形式の性質を検討しながら、漸進的にフィラーの外延を定めていく方針をとった。

第2章では、フィラーの指導の必要性や方法論に言及した先行研究等を概観し、日本語教育においてなぜフィラーの指導が必要なのか、これまでにどのような指導の方法が提案されているのか、そのような方法論にどのような問題があるのかを検討した。その結果、フィラーの指導を効果的なものにするためには「自然談話におけるフィラーの実態の把握」と「個々のフィラーの用法の解明」の2つの基礎的研究が必要なことが明らかになった。

第3章では、日本語のフィラーに関する先行研究において、上の2つの基礎的研究がど

の程度進んでいるのかを検討した。その結果、「自然会話におけるフィラーの実態の記述」はある程度の成果が積み重ねられているものの、「個々のフィラーの用法の解明」が十分でないことが明らかになった。

第4章では、「個々のフィラーの用法の解明」を本研究の目的に定め、そのための研究方法やデータを説明した。本研究は、フィラーを発する際話し手の心の中で何が起きているのかを問題にする「認知主義的」立場に立ち、主に、作例の自然さや表現効果を内省することで仮説を構築・検証する方法を採用し、事例の質的・量的観察やインフォーマント調査も必要に応じて補助的に用いている。

第5章では、「あの一)」と「その(一)」の使い分けを論じた。その結果、「あの一)」・「その(一)」はともに話し手が言語形式を製作するために意味構造を参照するという心内行動に対応し、「あの一)」は直接経験領域内の参照に、「その(一)」は間接経験領域内の参照にそれぞれ対応していることが明らかにされた。

第6章では、「えー(と)」,「うーん(と)」,「さー」,「スシュー(空気すすり)」,「そー(ですね)」の使い分けを論じた。その結果、「えー(と)」は話し手が今取り組んでいる課題は解決できそうだと思う時に発話されること,「うーん(と)」は話し手が今取り組んでいる課題は解決できないかもしれないと思っている時に発話されること,「そーですねー」は、対人コミュニケーションにおいて自分に向けられた問いを解決するために選択を行っている際に発話されること, 空気すすりは話し手が責任者として課題に取り組む際に発話されることが明らかにされた。

第7章では、「なんか」の用法を論じた。その結果,「なんか」は,「今語られる命題情報は、探索によって得られたものだ」ということを表す副詞であることが明らかにされた。

第8章では,「まあ」の用法を論じた。その結果,「まあ」の用法は大きく,「Aだ。(もつとも、仔細を言えばBもあるが)」のように意味が記述できる但し書き的用法と,「仔細はともかくAだ」のように意味が記述できる強調的用法の2種に分けられ、両者ともに副詞とみなすのが妥当であることが明らかになった。

第9章では、本研究の意義と今後に残された課題を述べた。本研究の意義は、第1に、日本語教育において個々のフィラーの使い分けを指導するための基礎的知見を提供したことであり、第2に、フィラーの定義を自明視せず、掘り下げて検討したことである。本研究では,「えー(と)」,「うーん(と)」,「あの一)」,「その(一)」,「そー(ですねー)」,「さー」, 空気すすりをフィラーと認める一方,「まあ」,「なんか」,「この(一)」をフィラーから除外した。今後は,「こー」や「もー」などの形式についても記述を進め,「話し言葉の文法」を描き出していきたい。

論文審査の結果の要旨

氏 名	大 工 原 勇 人		
論文題目	日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究 — フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて —		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	水 野 マ リ 子
	副 査	教 授	定 延 利 之
	副 査	一橋大学准教授	石 黒 圭
	副 査		印
	副 査		印
要 旨			
本論文は、未だ研究が十分には進んでいない現代日本語共通語のフィラーについて、認知主義的なアプローチから詳細な検討を加えたものであり、副題に現れているとおり、フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて、日本語教育の観点からの、説得力のある議論が展開されている。本論文は全9章から構成されており、以下、本論文が優れていると考えられる点を章ごとに概観する。 第1章「序」では、フィラーの内包的定義が示される（8～9ページ）。その定義自体は独創性の高いものではないが、その定義を万能のものとはせず、現実の形式をフィラーかどうか判断するのに外延的な手続きを取ることが表明される。この点が本論文の記述を信頼性の高いものにしている。 第2章、第3章は手続き的な意味合いが強いので評価からは外す。 第4章「本研究の方法と目的」では、認知主義的な立場からの研究であるという立場表明がなされ、心内情報処理機構のモデルが提示される（55ページ）。本文にもあるように、このモデルもまた執筆者独自のものではない			

が、こうしたモデルがあらかじめ示され、第5章以降の具体的なフィラーの形式がこのモデルとの関係で説明された結果、博士論文全体としての統一感が生まれている。

第5章「言語形式の製作に関わるフィラー」では、「あの（一）」と「その（一）」の使い分けが中心に検討されている。それぞれの形式を指示詞の延長としてとらえ、金水敏氏・田窪行則氏のモデルを援用しつつア系とソ系の違いを踏まえて説明をおこなっている点は説得力がある。とくに、これまで研究が少なかった「その（一）」について、再提出型、推論型、不定型という用法の区別を示した点は、談話の構造や結束性の研究への貢献が期待される。

第6章「課題解決行動に関わるフィラー」では、「えー（と）」「うーん（と）」「さー」「そーですねー」および空気すすりの異同が検討されている。その違いの根拠として「解決の見通し説」が立てられ、「えー（と）」「うーん（と）」「さー」の区別が明快に説明されている。また、「そーですねー」が選択に由来する点、空気すすりがフィラーと考えられる点も明確な根拠とともに論じられ、とくに後者は独創性の高い見解として注目される。

第7章「『なんか』とエビデンシャリティ」では、「なんか」をエビデンシャルの一種としてとらえることで、副詞として位置づけられることを論証したものである。最終的に副詞と結論づけられるどうかは、今後の研究の進展を待たなければならないだろうが、少なくとも何となくフィラーであるかのように思われてきた「なんか」の位置づけを、「どうも」や他のフィラーなどとの比較をとおして実証的に解決しようとした本章の内容は、これからのフィラー研究に一石を投じることは疑いない。

第8章「『まあ』と『内心のわだかまり』」では、「但し書き的用法『まあ』」と「強調的用法『まあー』」の区別の必要が説かれ、とくに前者は「明示的但し書き」と「非明示的但し書き」にさらに分けられている。このおかげで「まあ」の見通しはかなりわかりやすくなったと考えられる。また、「まあ」が副詞に位置づけられること、英語の下降上昇調に似た振る舞いをすることも興味深い見解として注目される。

第9章「結論」では、第5章～第8章までのフィラーの個々の形式の外延的な検討をとおし、第1章の内包的定義と合わせ何をフィラーとすべきか、個々の形式の用法の異同は何かを簡潔にまとめられている。

なお、大工原氏の査読つき学会誌論文(1)(2)も申し分なく、これらをふまえた本論文は当該領域におけるすぐれた学術研究の水準を満たしていると判断できる。

(1)大工原勇人 2008 「指示詞系フィラー『あの（一）』・『その（一）』の用法」『日本語教育』138, 日本語教育学会, pp. 80-89.

(2)大工原勇人 2009 「副詞『なんか』の意味と韻律」『日本語文法』9-1, 日本語文法学会, pp. 37-53.

以上により、本審査委員会は審査員全員一致で、本研究が日本語のフィラーについての重価で価値ある知見の集積であり、学位申請者の大工原勇人氏は博士（学術）の学位を得る資格があると認める。